

神戸市室内合奏団 定期演奏会

先達から受け継ぐもの、新生するもの
～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡～

神戸市演奏協会 第378回公演

「バッハに帰れ」

新古典主義への転向

～すべての音楽家が求める創作の糧、バッハ～

2013年6月15日（土）14：00 開演

神戸文化ホール 中ホール



<プログラム>

J.S.バッハ : フーガの技法 BWV1080 より

Die Kunst der Fuge BWV1080

Contrapunctus I :	Grundfuge I	Allegro moderato	アレグロ・モデラート
Contrapunctus II :	Umkehrungsfuge I	Allegro moderato	アレグロ・モデラート
Contrapunctus III :	Grundfuge II	Allegro non tanto	アレグロ・ノン・タント
Contrapunctus IV :	Umkehrungsfuge II	Allegro con brio	アレグロ・コン・ブリオ
VI :	Doppelfuge I	Allegro vivo	アレグロ・ヴィーヴォ
X :	Gegenfuge II	Allegretto (un poco maestoso)	アレグレット (アン・ポコ・マエストーゾ)

F.J.ハイドン : チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob.VIb-1

Konzert für Violoncello und Orchester Hob.VIb-1

I Moderate	モデラート
II Adagio	アダージョ
III FINALE : Allegro molto	フィナーレ : アレグロ・モルト

<休憩>

I.F.ストラヴィンスキー : ミューズをつかさどるアポロ

Apollon musagète

Premier Tableau(prologue)	第1場 (プロローグ)
Naissance d'Apollon	アポロの誕生
Second Tableau	第2場
Variation d'Apollon	アポロの踊り
Pas d'action	パ・ダクシオン
Variation de Calliope	カリオペの踊り
Variation de Polyhymnie	ポリヒムニアの踊り
Variation de Terpsichore	テルプシコールの踊り
Variation d'Apollon	アポロの踊り
Pas de deux	パ・ド・ドゥ
Coda	コーダ
Apothéose	アポセオシス

岡山 潔 新音楽監督に期待する

中村 孝義
(大阪音楽大学教授・音楽学)

ゲルハルト・ボッセさんが亡くなってから空席となっていた神戸市室内合奏団の音楽監督の座に、これまでも合奏団で、総合プロデューサーや首席指導者として重要な役割を果たしてこられた岡山潔さんが着任されることになった。すでにご承知のように、ドイツや日本のオケでコンサートマスターを歴任されたあと、東京芸大で後進の指導に当たっておられた岡山さんは、客員教授を務められたボッセさんとも親しく交わり、ボッセさんが最も高く評価し、深い信頼を置かれていた日本人演奏家の一人である。その意味でボッセさんの遺志を継ぐ人として、岡山さんほどふさわしい人はない。おそらく神戸市室内合奏団の今後の飛躍に大きな力を発揮されることだろう。

さてその最初のシーズンに当たる2013年度のシーズンプログラムである「先達から受け継ぐもの、新生するもの」には、同じくメジャーなオーケストラのコンサートマスターとして活躍したものの同志として、また偉大な先輩として、親しく交わってきたボッセさんに対する岡山潔さんの思いが率直に表現されているし、それはもちろん彼ら二人のことだけにとどまらず、合奏団の仲間たちや今日演奏する作曲家たちにまで広げることができるものであることを、「～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡～」という言葉で見事に集約されている。この言葉を見るだけでも、今後の神戸市室内合奏団の素晴らしい発展が大いに期待できる。

今回の定期のテーマには、「バッハに帰れ」新古典主義への転向～すべての音楽家が求める創作の糧、バッハ～と記されている。神戸市室内合奏団を常日頃からお聴きの皆さんなら、ボッセさんが大バッハを「音楽の中心点」とされていたことは良くご存知のことであるし、あわせて合奏団の成長のためには、ウィーン古典派や我々自身の時代（広くとって20世紀以降の音楽と見てよいだろう）の音楽に対する関心を失ってはならないと指摘しておられたことをご記憶の方も多いであろう。今回はそのコンセプトに従い、バッハやハイドンやストラヴィンスキーを演奏することで合奏団のアイデンティティーを再確認するとともに、さらにはその奥にどの時代の音楽もバッハから多くの創作の糧を得ていることを暗示しようという、実に手の込んだ、考え抜かれたプログラムが組まれている。若手の中でも嘱望されるヴァイオリニストの一人である白井圭さんを新しいコンサートマスターに迎えた合奏団が、指揮者なしで果たしてどこまで岡山さんの意図を実際の音楽として実現するか、期待を持たないではいられない演奏会である。

プログラム・ノート

J.S. バッハ : フーガの技法 BWV1080 より
Die Kunst der Fuge BWV1080

バッハが「音楽の父」などと称されることがあるように、彼が西洋の音楽史において占めた位置の大きさや影響力にはちょっと計り知れないものがある。いったいどれだけ多くの音楽家が、彼の音楽の洗礼を受け、そこからいかに多くのものを学んできたことか。それが西洋にお

いて音楽家や音楽が壁にぶち当たったときや、今一度そのアイデンティティーについて考えようとするとき「バッハに帰れ」といわれる所以でもある。バッハの音楽は西洋音楽の本質的なものを最も端的かつ集約的に示しているのである。

今日演奏されるのは、そのバッハの絶筆と伝えられる「フーガの技法」。最初の二つの曲を除いて、どのような楽器で演奏すべきかさえも指示されていないため、まさに彼が終生、その作曲法の中心においていたフーガの技法を集約した抽象的な作品とみなされることが多かったものである。この曲集の最後に置かれている曲が未完成に終わっているため、この作品自体が未完成作品とみなされることも少なくないのだが、最後の未完成の1曲が、実際は完成していたとの見解もあり、結論は出ていない。作曲されたのは長く最晩年とされていたが、近年では、使われた紙の透かし模様や筆跡の研究により、1740年代前半には作曲が始められていたことが明らかとなっている。初版譜は、次男のエマヌエル（これも現在では妻のアンナ＝マグダレーナが編者であるとの説が有力である）によって、大バッハの死後2年を経た1752年に出版されたが、版下に複数の人のものが使用されたため、曲順や曲名表記に大バッハの意図をどれほど反映しているかは分からない。とはいえ、この作品がフーガというひとつの音楽形式の頂点を示す聖典であることは疑いようもなく、今も多くの人を惹きつけてやまない。今日はこの作品から6曲が選ばれて演奏される。

F.J. ハイドン : チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob.VIIb-1 Konzert für Violoncello und Orchester Hob.VIIb-1

芸術家としての作曲家の意識がまだ完全に確立されていなかった古典派以前の時代の作品は、それが本当に伝えられている作曲家のものであるかどうかを特定するのは存外難しい。ハイドンやモーツァルトのように残された作品も多く、また真作と確定しているものが多い作曲家の場合であってもそれは変わらない。両者とも自作品目録の作成を手がけるなど、かつてに比べれば遙かに自分の作品であるという意識が強かったものの、何かの事情でそこから漏れ落ちれば、そして自筆と断定できるような確実な材料が残されていない場合は、真作かどうかは直ちに怪しくなってしまう。

実はハイドンの作品にも、未だそういう疑いをかけられているものも少なくはない。そして逆に作曲されたことは確かなのだが、その存在が未だ確認されない作品もある。実は今日演奏されるチェロ協奏曲第1番は、その存在が実に200年もの間知られていなかったものである。この作品は、1961年になってやっと、チェコの音楽学者プルケルトが、プラハ国立博物館で、ハイドン時代の筆写パート譜を発見したことから日の目を見ることになった。その後様々な音楽学的研究によって、これが、彼自身が関与して作成した目録に記載されている第1番のチェロ協奏曲と断定されるに至った。筆写譜の紙質や作品の様式的研究から、作曲されたのは恐らく1765年から67年頃と推定されている。ハイドンがやっとエステルハージー家の宮廷楽長に就任した頃のことであり、作品にはまだバロック協奏曲の名残も散見されるが、実に澁刺とした曲想を持つなかなかの名作で、1962年にチェコの名手サードロの手で復活蘇演されて以来、チェロ奏者にとって欠かせない重要なレパートリーの一つとなった。トゥッテイとソロが交代して現れるバロック時代のリトルネロ形式の性格を内包した協奏的ソナタ形式による第1楽章、独奏チェロが実に優雅な美しい旋律を歌う3部形式による第2楽章、第1楽章と同じような形で作られているアレグロ・モルトの第3楽章の3つの楽章からなる。

I.F. ストラヴィンスキー : ミューズをつかさどるアポロ
Apollon musagète

先頃あるクラシック関係雑誌で管弦楽曲ベスト10なるアンケートが音楽評論家などを対象に行われた。その第1位を占めたのが、ストラヴィンスキーのバレエ音楽「春の祭典」。このことが示しているように、ストラヴィンスキーの名は、彼が31歳の時にバレエ・リュス（ロシアバレエ団）のために作曲した、いわゆる原始主義と呼ばれる作曲法で作られたこの作品と深く結びついている。そのため時に彼の音楽のあり方が全てこうであったと誤解されている向きがなくもない。しかしストラヴィンスキーは、一方でカメレオン作曲家などと揶揄されることがあるように、実はその作風をコロコロ変えた作曲家でもあった。「春の祭典」などでこの作曲家をイメージされていた方は、今日演奏される作品を耳にされて、その整った古典的形式感と清澄な響きや優雅な旋律に驚きを隠せないだろう。まさにカメレオン作曲家の面目躍如たるところである。

これは1927年10月に彼がイギリスの雑誌で新古典主義への転向を表明した3ヶ月後に完成されたもので、まさにその主義を徹底した作品だったのだ。ヨーロッパ人にとって、古典的なものへの憧憬は、古代ギリシャを抜きにして考えられないが、このころ彼は、ちょうどギリシャ神話にも関心を持ち、それをテーマとする作品を書きたいと思っていた。まさにそれと時を同じくして、クーリッジ夫人から30分以内という条件付きでバレエ音楽を委嘱され、彼は心に温めていたイメージを元に筋も構想し作曲したのがこの作品であった。

彼は舞踊芸術を代表する女神として、文芸を司るカリオペ、マイムを司るポリヒムニア、音楽や舞踊を司るテレプシコールの3人のミューズを選び、それを率いるアポロを中心に据え、舞踊の神髄を表現しようと試みたのだった。全体は2場からなるが、全10曲はアポロがゼウスと人間の女レトの間に生まれ、最後は芸術を司る神となって、ミューズたちを引き連れパルナツス山に昇っていくという話に従って、4人の登場人物のソロやアンサンブルで構成されている。どの曲も全音階的な手法で旋律が書かれ、随所に対位法的技法を駆使するなど、古典主義への回帰を匂わせた瀟洒な魅力をたたえた音楽で、ストラヴィンスキーという作曲家の幅の広い音楽性を感じないわけにはいかない。

・コンサートマスター	白井 圭			
・チェロ・ソリスト	伝田 正則			
・第1ヴァイオリン	黒江 郁子	井上 隆平	萩原 合歓	前川 友紀
	花岡 沙季			
・第2ヴァイオリン	西尾 恵子	中山 裕子	幸田 さと子	奥野 敬子
	谷口 朋子	石田 紗樹		
・ヴィオラ	亀井 宏子	中島 悦子	横井 和美	木下 雄介
・チェロ	伝田 正則	田中 次郎	山本 彩子	熊澤 雅樹
・コントラバス	長谷川 順子	下元 美香		

<プロフィール>



白井 圭 Kei Shirai 【コンサートマスター】

1983年トリニダード・トバゴ共和国生まれ。6歳より徳永二男氏に師事。東京藝術大学附属高校を経て、同大学を卒業。その間、大谷康子、田中千香士、ゴールドベルク山根美代子の各氏に師事。2007年より、文化庁の奨学生としてウィーン国立音楽演劇大学でヨハネス・マイスル氏に師事した他、ヴェスナ・スタンコーピッチ氏のレッスンも受ける。

日本音楽コンクール第2位及び増沢賞、ARDミュンヘン国際音楽コンクール第2位及び聴衆賞など受賞歴多数。ソリストとして、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団定期演奏会への出演や、新日本フィルハーモニー交響楽団など内外のオーケストラと共演。ウィーン楽友協会のGläsernersaalや、トッパンホール(東京)、Schwarzwald Musikfestivalではリサイタルを開催した。

室内楽奏者として、国内外数多くの音楽祭、演奏会に招かれる他、2011年9月より半年間は、ウィーン国立歌劇場及び、ウィーン・フィルの契約団員として、著名な指揮者との共演を重ねた。現在「Stefan Zweig Trio」メンバー、田中千香士レボリューションアンサンブル音楽監督・指揮者として、また4月より神戸市室内合奏団コンサートマスターとして活動している。



伝田 正則 Masanori Denda 【チェロ】

3歳よりチェロを始める。東京芸術大学音楽学部附属高校を経て、同大学を首席卒業。福島賞、安宅賞、アカンサス音楽賞を受賞。在学中に河野文昭、向山佳絵子、毛利伯郎の各氏に師事。第9回長野アスペン音楽祭にて特別優秀賞、第18回霧島国際音楽祭にてグローバルユースビューロー賞、優秀演奏賞受賞。第70回日本音楽コンクール最高位入賞、併せて「徳永賞」受賞。他受賞多数。文化庁海外派遣員としてドイツ、ベルギーに留学。2006年よりDeutsche Radio Philharmonie

Saarbrücken Kaiserslautern(元ザールブリュッケン放送交響楽団)にて演奏しながら、グスタフ・リヴィニウスのもとで3年間研鑽を積む。シエナ音楽祭、クロンベルク音楽祭、リゾナーレ音楽祭、NHK-FMシンフォニーコンサート、木曽音楽祭などに出演している。現在ソロ、室内楽、国内主要オーケストラの客演首席奏者など多方面に活動しながら、神戸市室内合奏団の首席チェロ奏者を務める。



神戸市室内合奏団 Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また、定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮による「J.S. バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演はCDとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を開始した。